

# 不定詞付対格構文について

大 木 俊 夫

## は じ め に

現代英語では、最も著しく格変化すると考えられる人称代名詞でさえも、与格と対格の区別ができないのであるから、対格という言葉は、現代英語の syntax を論ずる場合には避けた方がよいであろう<sup>1)</sup>。対格という言葉よりむしろ目的格という言葉の方が適切なことが多いのであるが、標題のような構文を論ずる場合にはⅣの例で明らかなように、Main Verb の直後の (pro)noun ばかりでなく、その後の Infinitive をも含めて、(Pro)noun+Infinitive 全体を目的格と考えなければならない場合があるために、対格のかわりに目的格という術語を使用することができない。

小論では対格+不定詞の構文について、従来分類を再検討し、あわせてこの構文中に現われる Main Verb の統語的特徴を考察してみたい。

対格+不定詞の構文は次の7つに分類できる。

- I. (1.1) I told Tom to pay the debt.
- II. (2.1) I made Tom pay the debt.
- III. (3.1) I got Tom to pay the debt.
- IV. (4.1) I ordered Tom to pay the debt.
- V. (5.1) I wanted Tom to pay the debt.
- VI. (6.1) I saw Tom pay the debt.
- VII. (7.1) I supposed Tom to pay the debt.

以下この7つのタイプについて検討し、7つに下位分類される根拠を示す。

1. Iのタイプの動詞はその直後の名詞のみを目的語とするもので、しかもその目的語はVのタイプとは異なり〔+Human〕という選択素性を持つ。したがって(1.1)を部分的に受身変形した(1.2)

- (1.2) \*I told the debt to be paid.

は非文である。persuade もこのタイプに属する動詞であるから、Chomsky (1965) の中にあげられている有名な例についても同じことが言える。

(1.3) I persuaded a specialist to examine John.

(1.4) I persuaded John to be examined by a specialist.

に対して、(1.4) の John を [-Animate] の選択素性を持つ名詞、例えば the paper と置き換えた (1.5)

(1.5) \*I persuaded the paper to be examined by a specialist.

は非文である。warn, advise などがこのタイプの動詞である。これら I のタイプの動詞は、その直後の目的語と密接に結びついているので、この目的語を省くと非文になる点も、V の動詞と異なる。

(1.6) \*I told to pay the debt.

同じような理由で、that-clause を伴う場合も、目的語になっている (pro) noun を省くことができない。(1.8) も非文である。

(1.7) I told Tom that he should pay the debt.

(1.8) \*I told that he should pay the debt.

persuade, warn などについても同じことが言えるが、advise が that-clause を伴う場合には、advise の直後の (Pro)noun は (1.10) のように省かれることもある<sup>2)</sup>。

(1.9) I advised Tom that he (should) pay the debt.

(1.10) I advised that Tom(should) pay the debt.

又 I の構文は to-infinitive を省いても動詞の意味に変化が起らない点で、II, III のタイプの動詞と異なる。(1.11) と (1.12) とでは persuade の意味は同じである。

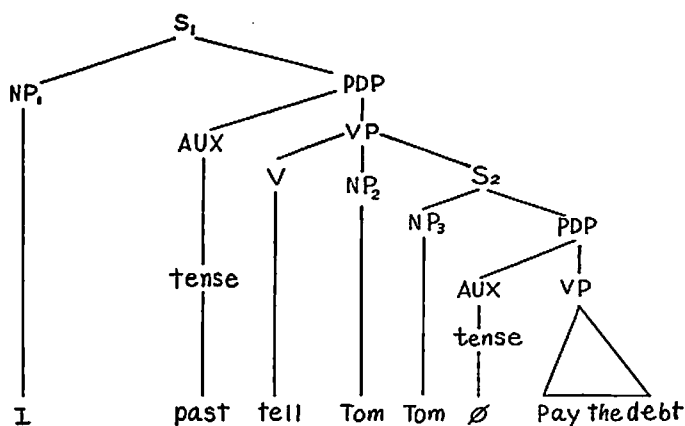
(1.11) I persuaded Tom to pay the debt.

(1.12) I persuaded Tom.

(1.7) (1.9) (1.10) の構文は (1.1) (1.3) などの構文より formal であり、従って頻度も低い。

(1.1) の phrase-marker は第1図のようになろう。

〔第 1 図〕



Iのタイプの動詞は、(1.1)を例にして考えて見れば明らかなように Tom が借金を払ったのかどうかは不明である。この点VIのタイプの動詞と異なる。VIの場合は、(6.1)を例にして考えれば、I saw Tom. Tom paid the debt. という事実から成り立っている。すなわち Tom は借金を払ったのである。第1図の構成文 (constituent sentence) の tense がゼロ・テンス [∅]+tense にしてあるのはこの事情を表わすためである。[∅]tense については後程もう一度触れる。

2. IIのタイプの動詞は目的語がその直後の (Pro)noun のみであるという点でIのタイプの動詞と同じである。このことは Chomsky (1965) がIのタイプの persuade について行っていること<sup>3)</sup>を make について行えば、容易に理解できる。

(2.2) I made a specialist examine John.

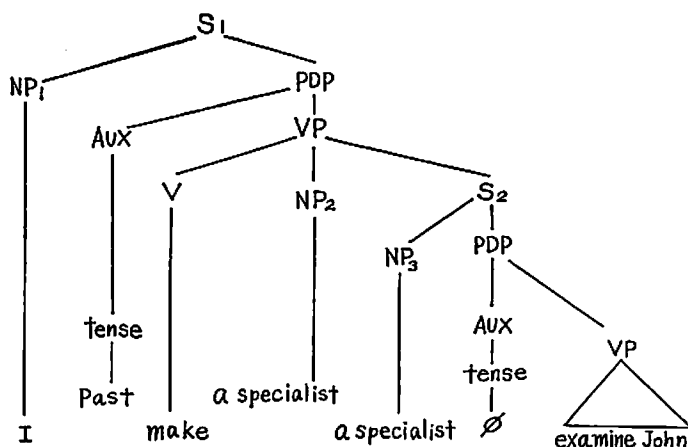
(2.3) I made John examined by a specialist.

(2.4) I expected a specialist to examine John.

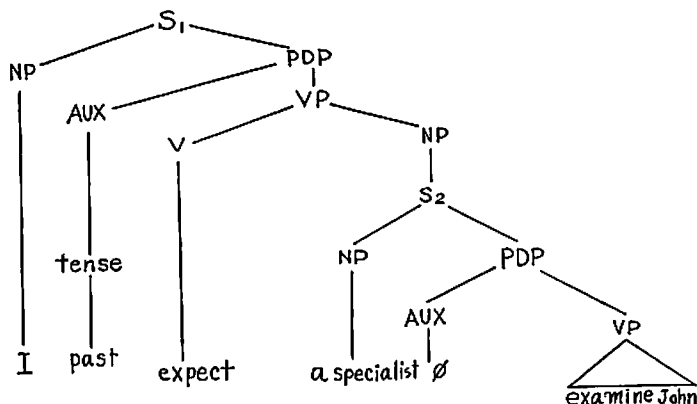
(2'5) I expected John to be examined by a specialist.

(2.4)(2.5) のいずれか一方が真実であれば、もう一方も真実になるが (2.2) (2.3) の間にはこのような関係は成り立たない。これらの文の phrase-marker は第2図及び第3図のようになろう。

〔第2図〕



〔第3図〕



Iの構文に比べて、IIの構文では、目的語の後の不定詞の to が delete されて表層構造に現われている点がIのタイプの構文と異なるところである。しかしこれも (2.6) (2.7) のように Main Verb が受身変形を受けた文では区別がなくなる。

(2.6) Tom was persuaded to pay the debt.

(2.7) Tom was made to pay the debt.

ただ (2.6) では to pay the debt を delete しても persuade の意味に変化はないが (2.7) では to pay the debt を delete すると make の意味が変ってしまう。この点が、IとIIの動詞のもう一つの相違点である。

IIのタイプに入る動詞としては make のほかに、have, let などが考えられるが、have の (2.8) のような使い方はアメリカ英語に多い<sup>4)</sup>。

(2.8) I had Tom pay the debt.

3. IIIのタイプの動詞の統語的特徴は一見Iのタイプに似ているが、Iと異なり目的語になる (Pro)noun は必ずしも [+Human] である必要はない。またこのタイプの動詞はIのタイプの動詞のように that-clause を伴うことはできない (3.2) は非文である。

(3.2) \*I got Tom that he should pay the debt.

また目的語の (Pro)noun を省けないところがIと似ており、Vと異なる点である。

(3.3) \*I get to pay the debt.

Iは不定詞の部分を delete しても Main Verb の意味が変わらないことは前述の通りであるがIIIの構文では不定詞の部分を delete することはできない。もし delete すれば Main Verb の意味が変わるか、あるいは非文になる。

(3.4) I got him to accept the offer.

(3.5) I got him.

get の他、cause, enable, force などがこのタイプに属する。

4. IVのタイプの構文では、動詞の直後の (Pro)noun のみが目的語と考えられる点では I, II, IIIと同じである。しかし I が [+Human] の選択素性を持つ (Pro)noun のみを目的語とするのに対し, IVのタイプの動詞は [-Animate] の (Pro)noun をも目的語にすることができる。

(4.2) I ordered the debt to be paid.

また I の動詞では that-clause を従える場合はその前に (Pro)noun が必要であったが, IVの動詞では不必要である。

(4.3) I ordered that the debt (should) be paid.

このことからIVの動詞と目的語の関係はIの動詞とその目的語との関係ほど緊密ではないと言えよう。具体的な例で言えば (4.1) の ordered と Tom との結びつきは (1.1) の told と Tom の関係ほど強くないということになる。

Zandvoort(1965) は I と IV のタイプの動詞を区別しないが, 以上述べたような統語的特徴から, これら二組の動詞は区別する方がよいと思われる。order の他, command, ask, request などがIVの中に入る。

5. Vのタイプの動詞では、動詞の直後の (Pro)noun と, それに続く to-infinitive 全体が、動詞の目的語と考えられる。この点がIVのタイプの動詞と異なる点であるが, これも次のような構文ではその統語的特徴を区別することは困難である。

(4.2) I ordered the debt to be paid.

(5.2) I expected the debt to be paid.

(4.2) と (5.2) との比較によってもある程度 察しられるが, このような構文では V の方が IV より頻度が高い。expect の他 want, like, hate, prefer などがこのタイプに属すると考えられる。

このタイプの動詞では expect, prefer, hate が次のように that-clause を伴うことができる。

(5.3) I expected that the debt would be paid.

(5.4) I preferred that the debt should be paid.

(5.5) I hated that the debt should be paid.

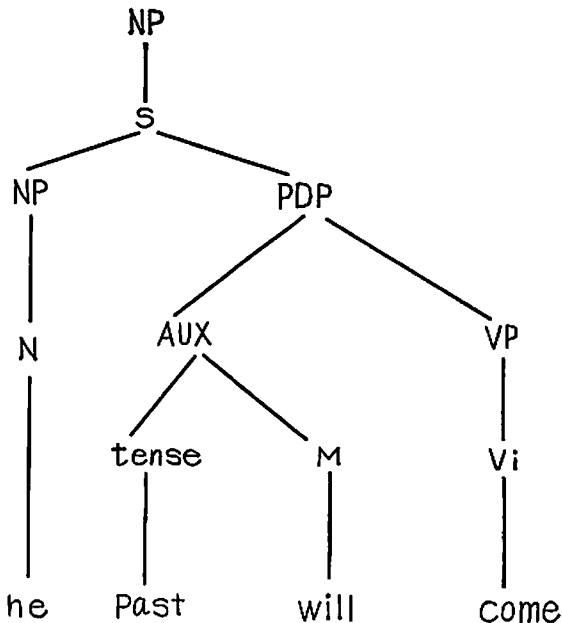
like は直接 that-clause を従えることはできないが、これに類似した (5.6) の構文があり、want の (5.7) のような構文は localism である。

(5.6) I like it that you are here.

(5.7) \*I want that the debt should be paid.

J. A. van EK (1967) は I expected him to come. の phrase-marker で constituent sentence の部分を第3図のように示している<sup>5)</sup>。

〔第 4 図〕



この P-marker からだと、I expected him to come. は I expected he would come から生成されることになる。しかし I expected him to come は 1 ですでに触れたように I-past-expect he- $\{\emptyset\}$ -come. のように  $\{\emptyset\}$

tense から生成する方が簡潔である。同じことは, Chomsky (1966)<sup>6)</sup>の(5.8)についても言える。

(5.8) I expected the man who quit work to be fired.

Chomsky は (5.8) を (5.9) から生成している。

(5.9) I expected the man who quit work was fired.

しかし, これも前記のものと同じように

(5.10) I past-expect the man who past-quit work  $\phi$ -be fired.

から生成した方が簡潔である。

一般に不定詞, 動名詞, 命令文などは, 深層構造においてはゼロの tense を持っていると考えれば, 上記のように, より簡潔な記述が可能であろう<sup>7)</sup>。

V のタイプの動詞については, 構成文 tense を欠く So とし, その PS rule を

VP  $\rightarrow$  V NP

NP  $\rightarrow$  it So

と考える考え方がある<sup>8)</sup>。しかしこのように規定してしまうと, (5.6) のように構成文が present の tense を持つ文の記述ができなくなる。構成文はやはり S として, その中に [ $\phi$ ]tense を設ける方がよいように思われる。

V の動詞はその直後に to-infinitive を目的語として伴うことができる。

(5.11) I want to pay the debt.

VI の中にも (5.12)(5.13) のように to-infinitive を目的語にとることができる動詞もあるが, to-infinitive の中が受動態になるのが普通であり, しかも V の動詞ほど頻度は高くない。

(5.12) I asked to be excused.

(5.13) I requested to be allowed to go.



また (5.14) は V の want と II の have との組み合わせにより (5.15) のように表わせることも興味深いことである。

(5.14) I want you to pay the debt.

(5.15) I want to have you pay the debt.

6. VI の構文の 表層構造は II の構文の 表層構造と同じであるが、II の PS rule が

$S_1 \rightarrow NP \ VP$   
 $VP \rightarrow V \ NP \ S_2$

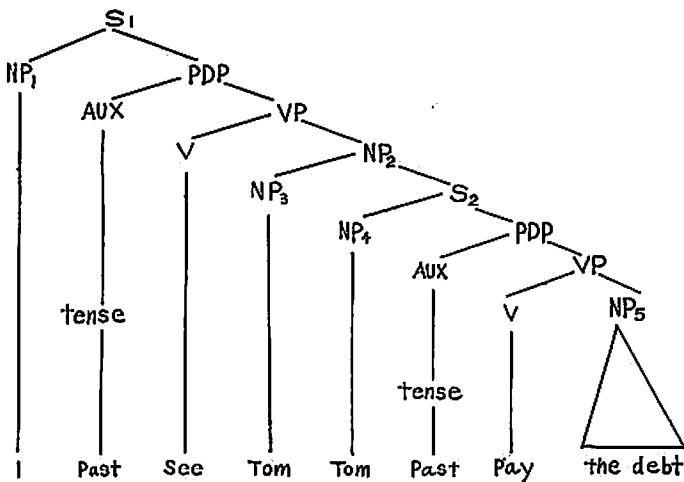
であるのに対し、V の PS rule は

$S_1 \rightarrow NP \ VP$   
 $VP \rightarrow V \ NP$   
 $NP \rightarrow NP \ S_2$

のようになる。

(6.1) (145頁参照) の phrase-marker は第 5 図のようになる。

〔第 5 図〕



第5図で明らかのように、構成文  $S_2$  は I (第1図) と異なり  $NP_2$  に直接支配されることになる。この点で VI の phrase-marker は (2.4) (第3図) と似ている。その理由は、次の文を比較すれば理解できる。

- (6.2) I saw that Tom was a debtor.  
 (6.3) I expected that Tom would pay the debt.  
 (1.7) I told Tom that he should pay the debt.

(6.2) (第5図参照) は  $NP_2$  が変形によって “that” complementizer を頭につければ、できあがる。(6.3) (第3図参照) も同じである。ただ (6.2) の場合は  $NP_4$  が identical noun deletion transformation によって消去される。ところが (1.7) では  $S_2$  の前、すなわち that-clause の前に NP が必要である。〔第1図〕で  $NP_2$  と  $S_2$  とが同じレベルにあるのは、このためである。

I で既に述べたように (6.1) は I saw Tom に Tom paid the debt が embed された文であるから、構成文 ( $S_2$ ) の tense は I と異なり  $\phi$  ではない。

このタイプに属する see, hear, feel, find は (6.2) で示したように that-clause を直接伴うことができる。この場合、(6.1) のような構文が主として physical perception を表わすのに対し、(6.2) のような構文は主として mental perception を表わすようである。このタイプの動詞が直接 to-infinitive を目的語としてとれないことは言うまでもない。また find が (6.1) のような構文において使われることは、Evanses (1957) が

*find* may be followed by an object and the simple form of a verb, as in *I found my attention wander*.

と述べているにもかかわらず、obsolete である。ただし (6.4) は慣用的表現で例外である。

- (6.4) I find it pay.<sup>10)</sup>

7. VII のタイプは believe, consider, imagine, suppose suspect, think などの、いわゆる思考動詞である。これらの動詞では、(7.2) のように that-

clause を伴う構文の方が好まれる<sup>11)</sup>。特に、構成文の Verb が Be 動詞以外の場合に、この傾向が著しい。feel も思考動詞として使われる時には (7.1) (7.2) のような構文になる。またこれらの動詞は一般に、直接 to-infinitive を目的語として従えることはできない。(7.3) は非文である。

(7.2) I supposed that Tom would pay the debt.

(7.3) \*I supposed to pay the debt.

### 注

- 1) Jespersen, *A Modern English Grammar*, Part V. p. 278 参照
- 2) Evanses (1957), p. 18
- 3) p. 22
- 4) W. S. Allen (1965), p. 25
- 5) J. A. van EK (1967) iv
- 6) Chomsky (1966) pp. 52-54
- 7) 岩倉国浩 (1969) pp. 42-46
- 8) 中島文雄 (1970) No. 30, p. 47
- 9) 岩倉国浩 (1968)
- 10) *POD* (1969) p. 305
- 11) Evanses (1957) s. v. believe, imagine, consider, suppose, suspect, think

### 参 考 書 目

- Allen, W. S. (1965). *Living English Structure For Schools*
- Chomsky, Noam (1965) *Aspects Of Theory Of Syntax*
- (1966) *Topics in the Theory of Generative Grammar*
- Evanses, Bergen & Cornelia (1957). *A Dictionary Of Contemporary American Usage*
- 岩倉国浩 (1968) “find + N + infinitive 構文研究”. 静岡大学・教育学部研究報告 1968, 121-130
- (1969) “英語の命令文についての一考察”. 『英語教育』 vol. XⅧ No. 9, 42-46
- Jespersen, Otto (1961). *A Modern English Grammar*, Part V
- 中島文雄 (1970). “Objective Complement の種類” (1) (2) (3), 『英語展望』 Nos. 29, 30, 31

- van EK, J. A. (1967). "A Grammatical Description of the Accusative with Infinitive and Related Structures in English." *English Studies*, vol. 48, No. 6.